

## 第9回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議 議事録（発言要旨）

- 1 会議名 第9回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議
- 2 開催日時 平成27年9月4日（金） 午後1時30分から午後3時まで
- 3 開催場所 KKR ホテル仙台 2階 蔵王の間 仙台市青葉区錦町1-8-17
- 4 出席者 別紙「出席者名簿」のとおり
- 5 概要 以下のとおり
  - (1) 開 会
  - (2) 開会の挨拶（挨拶：鈴木洋教育次長）
  - (3) 出席者紹介（自己紹介）
  - (4) 報 告（報告者：鈴木企画班長）
    - ① 平成27年度「幼児教育に関わる実態調査（アンケート）」の結果について  
資料1-1, 1-2に基づき報告
    - ② 平成27年度 第2期「学ぶ土台づくり」推進計画  
幼児期の保育・教育に係る事業集（県関連事業）（市町村関連事業）について  
資料2-1, 2-2に基づき報告
  - (5) 意見交換（司会：伊藤教育企画室長）  
テーマ：「学ぶ土台づくり」の推進について
  - (6) そ の 他
  - (7) 閉 会

### —以下意見交換発言要旨—

#### 意見交換

#### ≪ 伊藤教育企画室長 ≫

- ・ 今年度は第2期「学ぶ土台づくり」推進計画の初年度ということで、それぞれの団体の活動状況、課題、今後の取組などについて幅広く意見交換をお願いしたい。
- ・ それぞれの団体の取組状況、それから先程県の方から報告があった調査結果に対する御意

見なども含めて、おひと方3分程度を目安に名簿の順番に御発言をお願いしたい。

- ・ 小泉先生には全体の発言が終わった後、総括的な御発言をお願いしたい。

#### 【 宮城県国公立幼稚園・こども園協議会 渡邊副会長 】

- ・ アンケートに書いたことや私の今の職場で行っていることを中心にお話しさせていただく。
- ・ 国公立協議会の県大会を角田市で今年行う。県大会のサブテーマが「幼小連携について」である。国公立の園長はわりと小学校長と兼務しているものが多いので、小学校幼稚園の連携、交流は非常にしやすい状態にある。お互いの要望を聞きながら、幼稚園の子どもと小学生がずっと交流している。運動会も合同で実施し、練習も一緒に行う。芸術鑑賞会でも参加可能な内容のときは参加する。幼稚園にあまり絵本の冊数がないことから、小学校に図書室を貸してもらい、週1回来る小学校の図書支援員さんに読み聞かせもしてもらい、ALT がちょっと空いた時間にも幼稚園に来て交流している。先生方の交流もしている。小学校の施設設備を貸したり人事活用もしたりする。国公立の幼稚園関係では連携しやすいのではと考えている。
- ・ 村田町でも幼稚園、小学校、保育所の交流の公開を行う予定になっている。小学校と国公立の幼稚園は交流しやすいが、私立の幼稚園との連携の仕方は非常に課題である。小学校の校長として私立の幼稚園や保育所からくる子との連携をどうすればよいか、今模索中である。

#### 《 伊藤教育企画室長 》

- ・ 「学ぶ土台づくり」推進計画においても、小学校との連携については、先程の資料 1-2 の 14 番に目標指標として掲げてある。小学校との連携をぜひ情報交換レベルまで高めていきたいという思いでいるが、なかなか数字としては私立も含めて、あるいは今回認可外のアンケートの結果からもその部分が課題となっている現状が明らかになってきている。

#### 【 宮城県私立幼稚園連合会 吉岡常任理事 】

- ・ 資料を事前に配布し、会議前に見ておけるようお願いしたい。
- ・ 学ぶ土台づくりのテーマ的な部分で、家庭教育がどうなっているのかという部分に関して、まだまだ迫り切れていないと感じる。ワークライフの部分がだんだん深刻になっているのに、「基本的な生活習慣を見直しましょう」と言ってもなかなか難しいのではないかと。しかし、県教委のアンケートの方は、毎回同じような方向性で出している。数が集まればいいのではなく、子どもの実態把握を本当にしているのかという部分に迫っていかないといけない。子どもの教育環境を変えようと思うなら、もっと急ぎ足で行かないと課題が課題のまま終わってしまう。父兄の方は申し訳ないが何も変わっていない。かえってひどくなってきている。ただ数字で読むとそうではないことが分かる。現場で捉えるのと、実際保護者が答えるのとどこにこのギャップの原因があるのか。例えば父親が1時間以上と書いたときに「1時間くらい」の方を読むのか「1時間以上」の方を読むのか、たぶん以上を考える人はいないのでは。言葉的にももう少し細分化しないとアンケートの数が集まりただけではなかなか真意に迫っていかない。結果がだめということではないが、問題を吸い

上げ、明らかにしないと社会の方が急ぎ足で進んでいるので、すごく怖い。

- ・ いろいろ課題はあるが、「学ぶ土台」が続いている部分、幼稚園と保育園を合わせて考えようという部分、各家庭にいろいろな刺激のあるポスター・チラシを出している事に関しては評価している。
- ・ 評価となるアンケートをネット上だけではなくて、簡単なシートの返送にするだけでももう少しリアルな話が聞けるのではないか。ネットで答える人は、一般的に言うと少し意識の高い方という感じがする。実際問題として対象としなければならないところをよく考えてほしい。
- ・ 幼稚園や連合会では、学ぶ土台の研修会を開くなどして幼稚園に刺激を与えるようできる範囲で話しているが各家庭の姿は見えない。跳ね返りをどう判断するのかが現実的な形で見えると良いと個人的に思っている。今の子どもたちにとってどうなのか更に深さを出しながら広がりのあるような集まりの話が聞けると良い。
- ・ 国公立幼稚園・こども園協議会副会長の渡邊先生が話した幼小連携は、仙台とはまた違った感覚でしていると思う。仙台は幼小が一緒になっている部分はなく、地域によって全く考え方が違う部分が歴史的にあるのでは。地域的に分けた考え方をしないとなかなか進んでいかない。

#### 《 伊藤教育企画室長 》

- ・ 資料の事前送付は大変申し訳なかった。今後気をつけて対応したい。
- ・ 学ぶ土台づくりの進め方全体についても御示唆いただいた。
- ・ 子どもたちというよりは、親御さんへの情報提供などの啓蒙・啓発が根本的な課題と再確認した。

#### 【 宮城県保育協議会 平塚会長 】

- ・ 保育協議会として学ぶ土台づくりについて働きかけているが、十分ではない部分がある。
- ・ 先日は給食担当者の研修会に（県から）講師として派遣していただき、話を聞く機会がもてた。出席者から大切なことを学んだという評価を耳にしている。
- ・ 実状を話すと、印刷物等で生活習慣等の大切さについて機会あるごとに保護者の方にお知らせしたり、話をしたりしているが、なかなか十分に受け止めてもらえない。言葉が届かず、どこかに消えていくような、頭の上をすり抜けていってしまうことをいつも痛感している。
- ・ 保育園の世界の中で、最近言われているのが、新しい制度がこの4月からスタートし、その結果として恐らくは、ワークライフバランスの方に進むのではなく、子育ての外部委託の方が大きくなったのではないかと指摘する方が大勢いる。子どもの保育養育については施設に任せて、家庭では寝るだけという家庭が少しずつ増えていくのではないか。新しい制度の中では保育標準時間は11時間である。利用する人の時間が少しずつ延びている現状である。新しい制度がスタートした中で、状況がまた変わっていくのではないかと心配している。
- ・ 現場では今、保育士不足が深刻な問題である。県の支援で保育士・保育所支援センターなどの運営をさせてもらっているが、現実はまだまだ保育士が足りない。現場は余裕がない

保育をしている。保育士で生活経験が大変乏しい人が最近ますます増えて、そういう方へ十分な生活経験を補うような働きかけが施設側ではできない現状である。行事をするとそうめんゆで方が分からない、焼き肉では仙台牛の一番高級なものを買ってくるなど、当たり前とかこれが標準というものがだんだん無くなってきている職員が非常に増えている。子どもたちにできるだけいろいろな体験をさせようと思うが、体験させる側の方がよく分かっていない。専門家の方々を探してきて指導してもらったり、先生方の余裕がないので難しいが、経験を積むような場を考えたりしなくてはいけないのかなと思っている。

- ・生活習慣の問題で、最近聞いた研修会の話で、3才以上の午睡が、逆に生活習慣を壊しているという。確かに休息は必要らしいが、本格的なお昼寝は生活習慣をだめにし、夜眠れなくなり、結果として朝は起きられない、そういう状況を作り出しているのではないかという話もある。
- ・資料 1-2 を見て、目標指標の一覧表があるが 13 番に遊びの場としてコミュニティ施設の利用のことがあった。これについても、地域によってだいぶ違うと思う。市町村のレベルではなく県全体で、本当に宮城県が住みたくなる県と言えるように、その町の文化なり伝統なり、良さを伝承する場所を作り、どういう理由で住みたいかということが明確に説明できることが必要なのでは。

#### 【 宮城県小学校長会 鈴木副会長 】

- ・私が所属している白石市の様子について話したい。
- ・白石では、幼稚園からのアプローチカリキュラムと小学校のスタートカリキュラムを市内全体で作成している。市立、私立の幼稚園と保育園、小学校の代表の方々に出させていただいて接続カリキュラムを作成している。
- ・一例を挙げると、白石市内幼稚園保育園どこでも小学校でいう3学期になると「春が来たんだ」と「1年生マーチ」の曲を練習することになっている。これを練習することによって1年生に入ったときに、どの学校でも1年生を迎える会で歌える。幼稚園の方で場を作ってもらい、小学校の方でそれをうまく取り入れて、時間をうまく使って接続させていくということもできる。
- ・接続カリキュラムを作って今年で3年目となる。カリキュラム作成に携わっていない人たちとの連携を校内あるいは市内全体で考えていかなければならない。
- ・（小学校と幼稚園保育園との温度差に関して）幼稚園保育園は非常に熱心である。私たちが育てた子どもたちをよろしくという思いが伝わってくる。
- ・もう1つ、白石市内では幼保小の研修会を3つの地区に分かれて行っている。今年は幼稚園、今年は保育園・・・というふうに3年間のローテーションで実践をみる会を行っている。情報交換もある。幼保小の連携の中心をなしている。

#### 【 宮城県PTA連合会 増田副会長 】

- ・私が住んでいる富谷町では、わくわく町民会議といって広く町民の意見を聞こうという会議があり、子育てがテーマのときに私も委員として参加した。その中にここに関係があるのではないかと思う印象深い話があった。保育士が本当に不足していて、ベテランの方は残るが、結婚出産で若い方たちが続いていかないという話があった。同時に子どもの泣き

声が騒音にしか聞こえないという、子どもをどう育てたらいいか分からないお母さんたちが増えている。この2点にとっても危機感を感じて話を聞いた。

- ・ それとは反対のものとして、地域の方たちが七夕とか芋掘りとか、行事ごとに幼稚園や保育園に関わってくれることが、とても子どもたちに良い影響を与えている。保育士たちにも良い影響を与えてもらっているという話があった。この状況を良くしていく一つの方法として地域の方たちを巻き込んでみんなで子どもたちを育てていくことが、保育士不足、それから子どもをどう育てたらよいか分からないお母さんたちも解決していく方法だと感じた。

#### 【 白石市教育委員会 川口課長 】

- ・ 白石市では障がい児や気になる子が幼児期から成人まで一貫して支援できるように相談支援ファイルである「すこやかファイル」を配布して保護者などに利用していただいている。現在、保育園幼稚園で 20 冊、小学校で 50 冊、中学校で 24 冊計 94 冊を配布している状況です。このことに伴い、市では特別支援連絡協議会を結成し、特別支援コーディネーター研修会を 2 回開催し連携を図っている。参加者は市の健康・福祉部局、教育委員会、市内の福祉施設、保護者、ハローワーク、角田支援学校、小学校の特別支援教育のコーディネーターの方々からなり、この他幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校の先生方で構成している。また、「早期からの支援」として保育園、幼稚園、児童館、放課後クラブ、「ひこうせん」という発達に心配のある子などの通所施設があり、この施設におおよそ年 2 回、臨床心理士による巡回相談を行い、相談支援ファイルを子どもたちの成長にあわせて活用できるようにしている。これらのファイルは進級したときにも指導に生かせ、引き継ぎがスムーズになるなどの利点があります。最終的には施設などに入った際に養育手帳や障害者年金の申請にも生かせ、子どもが大きくなってからこれまでの状況がわかり、一から調べる必要がなく、各種の申請の際に重要な資料になると施設の方からも言われています。

#### 【 宮城県保健師連絡協議会 仙石会員 】

- ・ 保健師として地域で働くものとして、妊婦から新生児・乳幼児期と人間の始まりのところに関わっていると思うと、ますます身が引き締まる思いである。今回のこの計画の中でいう「愛着の形成の促進」とか「基本的生活習慣の確立」というあたりに母子保健事業も大きく関わっていると思っている。
- ・ 特に愛着形成の促進に関しては、乳幼児期からのスキンシップなどが親子関係の愛着をうまく形成していくということが言われていて、いろいろな場面で話をしてきた。現場で感じるのは、母子手帳交付のところで妊娠のときからのお母さん方の話を聞くが、母親自身が若く 10 代であるとか、支援者がいない中でこれから出産していかなければならない現状だとか、自分自身の育ちに満足していないという問題を抱えて、なかなか自己肯定感を持ってない状況にいるお母さん方と出会うことがある。そういうことを考えると愛着というところの始まりは、お母さん自身が安定していくことではないかと感じる。私たちもそういうところに目を向けて、力を入れていかなければいけないと感じている。
- ・ 基本的生活習慣に関しては、母子保健観点から様々な活動をしている。涌谷町の例では、

行政の栄養士の方で朝ご飯簡単レシピというレシピ集を作って、毎月食育の日の19日に幼稚園、保育所、社会福祉協議会や公民館に配り、各保護者の手元に届くように継続して行っている。情報提供をただで済ませられる方も中にはいるが、情報提供を受けてもそれを行動できない方もいる。乳幼児健診で問診とかをすると、例えばお母さんがいなくて、お父さんが一人でお子さんを育てていて、保育所に行って、仕事に行ってしまうという毎日の生活の様子を聞くと、とても朝、主食と主菜と副菜を揃えて食事を作ってくださいというようなことは言えなくなってしまった現状もある。ごく一部かもしれないが、そういう方々にも目を向けていくということも大事かと思う。情報提供でできる方は情報提供で、そうでない方はその方の生活を見ながら、その方に合わせた個別対応的なことも行政の立場では行っていく必要がある。今後栄養士とレシピの内容も検討していきたい。

**【 気仙沼市家庭教育推進協議会 星会長 】**

- ・ 資料 2-2 の幼児期の保育・教育に係る事業集の市町村関連事業の4ページの No103 と 105 が私どもの協議会の事業として気仙沼市と一緒に取り組んでいるところである。
- ・ その中で子育てほっとサロンといって年に5回程度、未就学時のお子さんとお母さんが来て、一緒に遊ぶ場を作っているという事業がある。その事業の中から気がついたことで、学ぶ土台の中の愛着形成の部分に関して、協議会ではもっとしっかり親子が愛着形成をつくっているんだろうかという視点で関わってほしいと思っている。この事業は、お母さん方、親御さんの意見を取り入れている。一緒に遊ぶとかお話を聞くとか、また一緒に防災について考えるとか、産後のリセット体操といって一緒に体を動かそうとか一緒に楽しく参加してもらおう中で、どのように親御さんがお子さんと関わっているか見ている。最初はなかなかぎこちなく関わっている親御さんも会を重ねるごとに、子どもに話しかける言葉であるとか、他のふれ合っている親子の様子を見聞きして参考にしながら、ぎこちなくても一緒にやろうとしている様子が見られる。会を重ねるごとに参加者も増えている。親同士で「楽しいから一緒に行かない」と声を掛け合っているようで、親同士のつながりの場でもあると思っている。
- ・ この事業を1時間くらい行った後、お茶のみタイムになるが、そのときも親同士がかかわるということが難しいようだ。推進協議会のメンバーが入って、話題を提供しながら会話の糸をつないで、家庭の問題とか御自身が抱えていることとかを話してもらおう時間をとっている。
- ・ 気仙沼市は震災があって、被災地として復興が進んでいるところだが、遊び場が本当に少ない。公園の中にまだ仮設住宅が建っている状態である。道路もダンプカーの往来が激しく、遊ぶ場が少ないのでほっとサロンのような安心して子どもたちがのびのびと遊べる場を大事にしたい。
- ・ 震災事業として始まった事業ではあるが、5年目以降の見通しがたっていない。市の方に働きかけながら市と一緒に主体的に協力をしていきたい。

**【 早寝早起き朝ごはん実行委員会 in 宮城 太田実行委員長 】**

- ・ 今から10年前に文部科学省から「早寝早起き朝ごはん運動」を民間でやりたいので協力してくれないかと言われた。事務局が今ベгалタになっている。

- ・ 私どもの団体は民間でやっているの一番困ることは予算が無いこと。私の仕事は予算をどう作るかということで特殊法人、財団法人というところに事業計画書を出して、なんとかお金を引き出してきているという状況である。
- ・ 生活習慣は大切に、いい習慣を身に付けると人生が大きく変わると思っている。6月7日に「今なぜ早寝早起き朝ごはん運動か」ということで川島先生に講話をいただいた。昨年度まで私が会長だったが先生と食事をしているときに「会長になって知恵を出してください。私どもは体を出しますから」ということで約束をして、今、会長になっていただいている。今回は県庁の2階の講堂を借りて、約350名の方が来てくれた。本来は小さなお子さんをもった方々や早寝早起き朝ごはんが弱いという方に来ていただきたかったが、早寝早起きが上手な年齢の方々がたくさん来た。今回は350名の約半数以上が年配の方だったので、もっと若い方に来てもらえるよう、改善しなくてはいけないと思っている。
- ・ みちのく杜の湖畔公園で1日親子連れで遊ぶベガルタウォークには、しっかり子ども連れで来ていただいているので良い。
- ・ 奇数月の第2日曜日、朝6時半から仙台駅東口の方で、ゴミ拾い清掃活動をしている。宮城県の大学生たち、概ね30名から40名と民間からで50名から100名ほどになる。お金が無いので、大学生には疑似マネーを使って、菓子メーカー、河北新報、東北電力、ベガルタなどに協力いただいた景品を出している。
- ・ もっともっと民間に落とし込んでやらなければならないと思っているが、幼稚園や保育園に我々のメンバーが紙芝居を持っていき、年間に40箇所くらい行っているのは良いことだと思っている。ただ要望が多すぎてできないことがある。今後もしっかり改善をして、民間の方に生活習慣が本当に良くなるように改善していきたい。

#### 【 くりこま高原自然学校 佐々木代表 】

- ・ 民間で自然学校を行っているの自然学校とはどんなことなのかということと全国的な動きの情報の2点をお話したい。
- ・ 1つは学ぶ土台づくりの推進計画の中の「豊かな体験活動」についての私が専門の自然体験のこと。幼児に関しては自然の中で保育とか子育てをすることに視点を置いている方がたくさんいる。「森のようちえん」という言葉で流れているが、自然の中で子育てをしようと言っている。私が関係しているところは園舎が無いのが基本である。認証とか認可の対象にもならない、その土俵にすら上がらない方々が動き始めている。
- ・ 今年の4月から新しい法律が施行されるまでに2、3年各自治体で子育て会議ということで検討されてきている、「森のようちえん」全国ネットワークというのがある。ネットワークは今全国で270団体・個人があり、今回の4月の法律施行にあたって、行政に認可を求めるわけではなく、ある程度自分たちできちんとやりましょうということで法人化を目指している。「森のようちえん」指導者養成も含めて、そのメンバーの中には、もちろん認可幼稚園・保育園の先生、保育士の方もいるが、純粋に「森のようちえん」で働いている自主保育の方もいる。
- ・ そういう流れの中で県独自の自然保育ということで動いているのが、長野県、鳥取県、三重県である。3年前に若い知事さんが10名集まって、子育てに特化した県政を行うということで始まった子育て同盟というのがある。長野県の阿部知事と鳥取県の平川知事はす

ごく熱心だ。実はそのメンバーに宮城県の村井さんも入っている。長野県は来月、信州型自然保育という認定制度を開始する。これは認可保育園、幼稚園を含めて、1週間に何時間以上外で保育しますよという、自然体験を推進するという動きが長野県である。鳥取県は、「森のようちえん」というのを県として認証している。

- 全国的には、全く認可、認証外だが「3才、4才、5才の頃は子どもたちを自然の中で育てたい」という人たちに絞って活動している人がいるということを紹介したい。
- 学ぶ土台づくりの「豊かな体験活動」、その中の「自然体験」をどう捉えるかについて、宮城県は出遅れているという感じがする。10県の知事の中でもただ加盟しているのが宮城県。他の県はいろいろ具体的に動いている。加盟するならばきちんと動くように言ってほしい。
- もう1つ、うちは自然学校ということで、小学生中学生の夏休みとか限られた期間の冒険的なプログラム・自然プログラムを行っている。幼稚園のプログラムもここ10年行ってきた。毎日では厳しいので、週末型だったが、昨年からは仙台で週に3日となった。来年は4日行いたい。もちろん認可外である。3家族が加わって徐々に広げたいと思っている。
- 西公園で冒険遊びとして自主的に動いている人がいる。そういう人たちも学ぶ土台づくりの土俵で支援できる形をつくっていただければと思う。
- 最後にもう1点。震災後に放射線の関係で外で遊べない福島の子どもたちを受け入れる施設を作っている。今はもう、だいぶ意識が下がってきていて「大丈夫だ」という認識で行っているのだが、実は我々のネットワーク、NGO、NPOが調べると放射線は高い。特に子どもたちに影響がある通学路とか公園を「正確な測定器で細かく測定しましょう」ということで測定していたら、通学路だと車道は水が流れるから低いけど歩道は高いことが分かった。歩道でも側溝があるところは特に高い。それから畑がある端は高い。だから通学路は真ん中を歩いた方がいい。宮城県はそれほど放射線が気になっていないかもしれないが、県南の丸森とか県北の栗原もかぶっている。子どもたちの環境を考えると、もう一度環境を調査し、知らないと不用意に浴びてしまうケースもあり特に子どもたちには一番影響するので、環境のことも考えて何かできないのかなということも話題にしてもらいたい。

#### 【 NPO 法人まなびのたねネットワーク 伊勢代表理事 】

- 私どもの団体はNPOとして学校教育の支援とか、大人向けの研修とかをさせていただいている。その中で関わることを話させていただく。
- 私たちのところは県でいう志教育を主軸にいろいろな活動をしている。学校の中での授業はアクティブラーニングということでさせていただいているが、小学生中学生高校生と関わっている中で、社会的な自立に向けて何か課題を抱えているような子どもたちは、紐解いていくと、幼児期の親子間の愛着形成ができていないということが見えてきている。積極性が足りないであるとか、自己肯定感が低いとかいったときに、お母さんとの関係性が課題にたどりつくというのが実感である。
- 具体的に今、私の方に依頼があるのが、小学校の就学時健診、来年小学校に入学する幼稚園とか保育園に行っている子どもたちとお母さん、いわゆる保護者の方が集まったときに30分から50分の短い時間で何か行ってほしいということである。そのときには実践的なものを行うようにしている。志教育という視点であれば20年後のお子さんの姿を想像し



ていただいて、そのときにどういう大人になっていたらいいのかということをお母さんたちにまず考えてもらう。目の前の子育てのことでいっぱいいっぱいなんだけれども、20年後に何のために子育てや教育があるのかという視点に立っていただく。だいたい25歳くらいになっていると思うが、そのときにどんな大人になってほしいか、やはり社会に出て自立してほしいとか、思いやりのある人にとかな自分なりの言葉でお母さんたちが語り出す。そういったときに、具体的に「では今何をしたらいいでしょうか」と親子間の愛着形成だとか、志教育に大人の声の掛け方が非常に重要だと話している。小さい子たち、特に幼児期はほめるとか認めるとかが大前提ではあるが、具体的な声のかけ方をどうすればいいのかというのをワークの中で行うようにしている。お母さんたちから「こういうことを学べると良かった」という声が多く、すぐに生かしてもらえる。

- 大人の話し声を聞くと、先生方もお母さん方も、指示・命令、禁止の言葉が多い。そうなると思回路がストップしてしまっ、指示待ち人間が増えていくという社会にあまりいい影響を及ぼしていないということが見えている。直接携わるお母さんたちとか身近な大人がどういうふうに子どもたちと接していけばいいかということをもまず考えて接していかなければいけないと思う。
- 私の身近な大人で、シングルマザーが増えてきている。あとは共働き。シングルマザーの子に聞くと、「保育園に預けているんだけど役に立った研修というのは、実践的な内容で行った研修。」「そういうのを学ぶ機会があるといいな。」「その学ぶ機会を通してお母さんたちと交流を図れた。」ということを行っている。お母さん自身が今20代の子が多く、自分自身の人生そのものもなかなか考える機会もない。自分の人生もあつた上で子育てという視点になってもらえるといいのかなと思っている。そのような機会がより多くの場所で行うことで少しずつでも変わっていくのではないかと感じている。

#### 【 河北新報社教育プロジェクト事務局 砂金事務局長 】

- 今日、河北新報を検索して「ルルブル」とか「はやねはやおき朝ご飯」を見たら、あまり載っていなかった。申し訳ないと思っている。載っているのを1つ持ってきたら、先程おじいさんおばあさんしか集まらなかったという講演会の前触れ記事だった。
- 最近いろいろなイベントを行うと、お年寄りの方は一生懸命参加してくれる。健康と書いているだけで何百人も集まる。しかし、若いお父さんとかお母さんを集めることが難しくなっている。
- 私どもはNIEがらみで学校に行って新聞の話をするのが仕事だが、最近はPTAに行ったりしながら新聞を使ったコミュニケーション、子どもとの話し合いの仕方の話をすることが多くなってきている。新聞の記事を読んで、子どもと一緒に対話の題材にする方法などを伝えている。
- 知らない人同士でも同じなのだが、自分の本音をばんばん話すというのは最近難しくなっている。本音をメインにコミュニケーションをとることが不得意な人が学校の先生も含めて多くなっている。
- 我々が今教えているのが新聞の記事を使って話し合うこと。新聞の記事というのは第三者の記事なので、それに対してお互いの思い入れを話しているうちにお互いの気持ちが分かってくる。最初のとりかかりとしては楽ちんなもの。それをやり始めているが、それでも

全部が全部やれるわけではないので、なかなか全体の人たちにつながっていかない。

- ・ 子どもたちとのふれ合う内容について先程からアンケートを見ているのだが、テレビとビデオを見るというのがある。これもテレビやビデオに映っているものを題材にコミュニケーションをとれば、子どもと一緒にいろいろなことができると思う。漠然と2人で見ているとか3人で見ているとかご飯中に見ているのかなのか、テレビゲームをするにしてもゲームの中身について話し合うとか、どういうふうに使っていくかが分かるともう少しいろいろな方向が見えてくるのではないかと思う。

#### 【 尚綱学院大学 小泉准教授 】

- ・ 一人一人にコメントしていきたいが、人数が多いのでまとめて発表する。
- ・ まずは、幼稚園、国公立、私立、保育の現場の先生方からいただいた話の中で、地域の歴史や特性が重要なキーワードになってくると感じた。例えば宮城は非常に深い歴史があり、農業に関わっている地域なのか、漁業に関わっている地域なのかといった、地域の特性が必ずあるはず。保育園・幼稚園・小学校の連携や、子育て支援というものがうまくいく背景には、このような特色が背後にあるのではないか。地域の歴史や特性を拾い上げて、自分の住む地域の利点をしっかり押さえていく必要がある。さらに人的資源、物的資源を掘り起こして、連携・支援にどのようにつなげていくのかを考えることが重要だと思った。
- ・ もう1つ、現場の先生方から、若い世代は養育者としての力が乏しいという話があった。養成をしている大学としては非常に耳が痛い。現代の学生は生きる力が非常に弱いということが大学の教育現場でも懸念されている。そのため、地域の若者の生きる力の育成に力を入れていく必要がある。このような状況の中で重要なのがまさに、「早寝早起き朝ごはん」といった基本的な生活習慣であると思う。
- ・ 大学では、学生の深夜バイトにより修学がおろそかになり、社会人も生きる力も身に付かないことが問題となっている。こういったことから、社会人力・生きる力を大学生の頃から身に付けることが重要と感じた。
- ・ 幼稚園・保育園・小学校の連携について先生方から非常にうまく連携している様子を伺い、感銘を受けた。その中で非常に心に響いたのが、同じ地域の子どもの中で経験を共有しているという点である。子どもにとって経験を共有しているといった安心感が進学などで新しい集団に移行する際に、心の安定につながる。地域特有の経験の共有は非常に重要と感じる。同様に、我々教職員等も同じ地域で知識を共有することで、幼稚園・保育所・小学校さらに中学校・高校・大学と地域で連携していくことができ、地域の子どもを見守る体制を取ることができると思った。
- ・ 今回イメージングというお話が伊勢先生からあった。20年後の子どもをイメージするというのは非常に重要である。同様に、自らの養育者としての発達、親としての発達などについて、これまでの自分自身を振り返りつつ将来をイメージすることが重要となる。例えば親の発達に目を向けると、子どもに手のかかる今現在の生活状態から、少し楽になった将来、子どもが手を離れていった将来というようにイメージすると、見通しを持つことができる。将来病気になることを心配し「早寝早起き朝ごはん」、60歳まで子どもが就学して就職するまで自分の健康を保たなくてはならないといった振り返りもできる。生涯発達の見通しというのも実は非常に重要。

- 最後にコミュニケーションについて。イベントへの参加とか自然体験への参加、河北新報の方から指摘のあった新聞を使ったコミュニケーションなどを親子・地域の方々のコミュニケーションのツールとして大いに活用することができる。悪い側面ばかりに目を向けるのではなく、ツールとしての活用面に少し目を向けていくといいのではと思った。

#### ◀ 伊藤教育企画室長 ▶

- おひとつ3分とっていたが、白熱し、若干余る予定だったが時間となってしまった。時間はないが、最後にこれだけはということがあったら伺いたい。

#### 【 宮城県私立幼稚園連合会 吉岡常任理事 】

- 学ぶ土台づくりのベースで「元気いっぱい夢いっぱい瞳かがやくみやぎっ子」という文言のテーマを決めたときには、かなり時間をかけて決めた。ただ実際どういう実態を捉えていったらいいのだろう、その実態の部分に本当に迫っているかという事が私にはだんだん見えなくなっている。何を求めていかなくはいけないのかということをもう一度みなさんと共通にしないと実態報告だけでは進まないと感じる。
- それから現場的に、例えば今年手足口病が大流行だが、病院の先生の診断でそう言われませんでしたということになると、中で右往左往して広がるだけである。保育士や幼稚園の先生は親の話を聞く。親はどう子どもと向き合わなくてはいけないか、誰のための瞳かがやくのか、そこに戻ってくれないと困るのですが、実態はこうです。児童福祉法は親ベース優先の入所選定なので、親が仕事がある事を拒んではだめですよという部分が出てくる。それが本当に子どもにとって瞳かがやくことなのかどうかということを検証していかないと学ぶ土台が残念ながら学べない土台になってしまう。子どもたちのことを現場だったり親だったり学ぼうとするのを訴えていくような部分で始まったのが学ぶ土台ではないかと思いつつ私は参加している。いい形で進んでほしい。そんな部分をもっと見極められたらよいと思う。
- 宮城県の教育委員会ではスタートカリキュラムのことについては学校に話しているかもしれないが、アプローチカリキュラムに関しては幼稚園対象に話の機会も持っていない。仙台もそう。当たり前のように教育委員会の方はアプローチカリキュラムという言葉を出す。私は自分で作ったが、宮城県の方針と仙台市の方針を分からないまま作らなくてはならなかった。小学校との連携を大事に考えると、私を含めて現場の緊急を要する部分である。アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムのすり合わせが必要であれば、話合いの土俵を絶対作るべき。トイレを例にすると幼稚園や保育園と小学校では、トイレの形が違う。使い方だけでなく形なので、子どもたちは行って経験しなければならない。その部分に関してもっともっとアプローチの部分だったりスタートの部分だったり、小手先のような時間で話すのではなくじっくり話合いができる時間が必要。
- 今年の教育課程では学校の先生にも呼びかけしてくれた。県の教育委員会を評価したい。小学校の先生が幼稚園の教育課程に来てくれたことがすごくありがたいと思っている。

#### 【 くりこま高原自然学校 佐々木代表 】

- 学ぶ土台づくりの土台の話をやっぱり考えると体験をどうさせるかがポイントだと思う。

さっきあったそうめんの話も体験していないからそうなる。最近うちのキャンプにすごくやけどをする子が多い。なぜかというところオール電化でIHのため生活の中に炎が無いから。炎の熱さが分からなくて、いきなりまきを触ってやけどする。あと刃物。包丁が無い子は、包丁をなでている。家にまな板と包丁が無い。「どうしてるの」と聞くと、「お母さん、はさみで切ってる」とか「切ったものを持ってくる」とか言う。生活の中にも刃物と炎が消えている。生活の中に刃物と炎が消えているということはゆゆしき問題。教育の問題でもあるし、文明の問題でもある。土台がどこにあるかというところ、どう体験させるのかというところだと思う。今後、体験をどうさせていくのかと掘り下げていってもらえれば何か糸口が見つかるかなという気がする。

◀ 伊藤教育企画室長 ▶

- ・ 時間を超過して様々な意見をいただいた。学ぶ土台づくりの計画の進め方そのものについてのアドバイス、今年度、来年度の事業実施に向けての示唆、参考となる御意見もいただいた。県・市町村も今日の情報を共有して今後進めていきたい。

以上